

The 40th 第40回東京モーターショー2007

TOKYO MOTOR SHOW 2007 News vol.5



平成19年10月29日

世界に、
未来に、
ニュースです。

Catch the News,
Touch the Future.



トヨタ自動車

「サステナブル・モビリティ」の実現 めざす新たなコンセプトを続々提示



テーマ:「Harmonious Drive 人と、地球と走る、あたらしい明日へ。」



トヨタの未来を象徴する4つのコンセプトカー

今年で創業70周年を迎えたトヨタ自動車は、6つのワールドプレミア、2つのジャパンプレミアを含む合計21モデルを出品した。だが、今や世界ナンバーワン・メーカーになろうかという、単なる勢いに任せて大量投入したわけではない。そこには新たな世界戦略を見据えたストーリー展開がしっかりと秘められている。

渡辺捷昭社長は年次会見ですでに、これからのトヨタのコーポレートコンセプトとして①サステナブル(持続可能な)・モビリティ(くるま)、②サステナブル・プラント(工場)、③サステナブルな人と社会への貢献活動——の3本柱を打ち出していた。これに基づき、上記3本柱の1つであるサステナブル・モビリティの新たな方向を今回の東京モーターショーで示したの

が環境コンセプトの「1/X」、心健やかコンセプト「RiN」、新パーソナルモビリティ「i-REAL」、超高効率パッケージ「iQ CONCEPT」の4モデルである(iQ CONCEPT以外はすべてワールドプレミア)。この4モデルは揃ってセレモニーブースで連日パフォーマンスを見せているから、ユーザーの方はずいぶんチェックして見て欲しい。

そのほか、次期アルファードと目される新世代高級ミニバン「FT-MV」(ワールドプレミア)や、次期クラウンとウワサされる「CROWN HYBRID CONCEPT」(同)、次世代都市型ビークルの「Hi-CT」(同)、ハイブリッドスポーツコンセプトカーの「FT-HS」(ジャパンプレミア)、それに今シーズンのトヨタF1カー「TF107」などがズラリ勢揃いしており、目を飽きさせない。

「1/X」(エックス分の1)



トヨタは従来から環境・エネルギー対応のクルマづくりを目指してきているが、この方向性をさらに一歩進めたコンセプトモデル。車両重量をX分の1に軽くすることでエネルギー効率をX倍にしようとの開発意思をネーミングに示した。実際、プリウスに比べ燃費は2分の1、車両重量は3分の1の約420キログラムにまで軽減するのが目標だ。

「仕様から性能、素材、製造プロセスに至るまで、クルマづくりのすべてのプロセスを原点から見直した」(渡辺社長)。パワートレインは500ccという小排気量エンジンと電気モーターの組み合わせで、外部電源からの充電も可能としたプラグインハイブリッド。リチウムイオンバッテリー採用でさらに軽量、高性能化をはかる。燃料はバイオエタノールも使えるFFVモデル。ボディ骨格に高剛性素材CFRP(炭素繊維強化プラスチック)を使って衝突安全性にも威力を発揮。各ピラーの幅を細くして周囲の光を感じる広い視界を確保。対向車にとってまぶしくないヘッドライトへの工夫なども盛り込んでいる。

「iQ CONCEPT」



「何かを成すために他の何をも犠牲にはしない」(渡辺社長)との強い信念の下で開発された、コンパクトカーのニューワールド基準をめざすモデル。

全長が現行の軽自動車の枠よりも小さく3メートルを切っているにもかかわらず、おとな3人に加え、子供1人が快適に座れる革新的な超効率パッケージを実現。それによって優れた燃費とともにCO₂排出量の削減を果たすなど、高効率パッケージからのアプローチによる環境性能の向上に道を大きく切り拓いた。ものすごく小さい割にタイヤが大きくスポーティーなのでインパクトのある存在感をかもし出す。わざわざ設けられた子供専用見学席で身を乗り出していた子供たちからは思わず「カッコイイ!」の声も。

先のフランクフルトショーでワールドプレミアとして出品されるや世界中の注目を浴びた。よく見ると、ステージ上のモデルは左ハンドル仕様だ。欧州市場への投入が強く企図されているようだが、国内でも来年の市販化が予定されているとか。



子ども優先に設けられた通路



「FT-HS」



「i-REAL」を押して歩く渡辺社長

トヨタ自動車
渡辺 捷昭 社長

プレスブリーフィングから

「世界をリードする気概で、次なるモビリティ社会の実現へ」

「人と、地球と走る」。この言葉は社会貢献への喫緊の課題とも言える、環境・エネルギーへの対応を中心とした「持続可能な発展」に資するために、これからのトヨタが取り組む方向を示しています。その取り組みの一つとして今回のショーにおいては、環境・エネルギー・安全への対応を中心に、①パッケージの革新、②エネルギー効率を高める革新的なクルマづくり、③乗るほどに健康になるクルマ、④人との一体化を追求した新しいモビリティ——の4つの新たな技術開発の方向を提案しています。おかげでさまでトヨタは今年70周年を迎えることができました。今後はさらに、次なるモビリティ社会の実現に向け、世界をリードする気概で取り組んでいきたいと思っています。

「i-REAL」



トヨタがこれまで手がけてきた1人乗りパーソナルモビリティの「PM」「i-unit」「i-swing」の進化形で、REALの呼称どおり、いつでも実用化がスタンバイのコンセプトモデルと言える。

フロント2輪、リヤ1輪の3輪タイプ。走行スタイルに応じて長さ、高さ、傾き(形)をドライバーの思いで自在に変えながら行きたい所に動ける。ホイールベースを短くする歩行モードでは、立っている人と目線がほぼ水平に合うように設計されており、ブース・パフォーマンスに見入っていた2人組の来場者からは「これって、大きなオフィス内でも使えそうだな」の反応も聞かれた。

純EVで走行スピードが従来型の時速30キロ余から同60キロへと速くなっている。一般道をクルマと同じように走れるレベルだ。周辺監視センサーによって、歩行者の接近を音や振動で知ることができるサポートシステムになっているので、人以上に人とぶつからなくてすむかも。2時間での充電が可能となった。

「RiN」



乗れば乗るほどリラックスできて健康になるクルマの一つとして開発。言わば「健康ぐるま」。ハンドルに内蔵のセンサーでドライバーの体温や脈拍などを検知し、それに応じた良いイメージ映像(心理状態)をメーター内に映し出せる「調心ステアリング」を採用。背筋を伸ばし、まさに“凛”(リン)と座れる「まっすぐシート」や、快適温熱シート、酸素濃度コンディショナー、スポット加湿などなどカラダにいいことずくめのクルマだ。

サイドボディの2段ガラスが目を引く。足もとの自然にも目をやれる雪見障子窓の設置は、力強く上に伸びる屋久杉をモチーフとした外形デザインと相まって外界とクルマが自然にハーモニアスするムードをかもし出す。1,000、1,500ccクラスの設定が見込まれ、ハイブリッドシステムを搭載するもよう。燃料はバイオも可能とされるようだ。

レクサス

21世紀のグローバルプレミアムブランド —— 2モデルを国内投入



LEXUSが国内に導入されてからほぼ2年。この間セダン系を中心にラインナップの充実が図られ、07年5月にはLEXUSブランドの頂点となるハイブリッドのセダン「LS600h」「LS600hL」を投入し、21世紀におけるプレミアムカーの方向性を示した。と同時に、社会との調和をめざしたLEXUSの価値を具現化するためにハイブリッドシステムをキーテクノロジーとして位置づけ、走行性能と環境性能の両立を図ってきた。



▲世界最高峰のスーパースポーツ「LF-A」



▲「LF-Xh」

前回、前々回の東京モーターショーではレクサスとトヨタのブースの分けがかなり意識して行われたが、今回のショーではサステナブル・モビリティの実現に向け、オールトヨタとしてのLEXUSの意味が付与されている。これからのLEXUSは、クルマ本来の魅力であるエモーショナルな走りによるときめきにも一段とみぎかけ、新たなLEXUSの価値として提供していくとの方向づけだ。このことを象徴しているのが今回ワールドプレミアとして出品された「LF-Xh」だ。LEXUSのデザインフィロソフィであるL-finesse(エル・フィネス)を具現化したスペシャルティSUV。ハイブリッドシステムを採用し、卓越した動力性能による走る喜びと環境性能とを、これまでにない高い次元で融合することを目指している。次期ハリアーとみられ「RX」の呼称が与えられるとされている。

10月27日開催

■パネリスト:

テリー伊藤 (演出家)
宮田佳代子 (フリーキャスター)
杉山 雅洋 (早稲田大学商学大学院教授)

■コーディネーター・進行アシスト:

御堀 直嗣 (モータージャーナリスト)

■進行アシスタント: 小山 好子 (フリーアナウンサー)

■主催: 自動車税制改革フォーラム

道路特定財源のぼったくり暫定税率が来年3月で期限切れを迎え、今年はその扱いをどうするかを決める大切な年とあって、5回目となるこのフォーラムの議論も例年以上に熱いものとなった。テリー伊藤氏はコンビニで売ってるポテトチップ1袋の量が最近1割も減っている理由が「原材料費の高騰ではなく運送費の上昇にある」ことを指摘。宮田さんは「暫定税率を一度本則に戻した時に果たして、本



当に道路はもう要らないのかどうかを感じる所からスタートする必要性を強調。杉山教授はシーザーと並び称されるアッピウス・クラウディウスが今に残るアッピア街道を作った故事を引用し、道路作りの大切さに言及。御堀氏がパネリストの意見を集約する形で、もっと適正なクルマ税制になれば、ユーザーも再びクルマに夢を買い手ができるように、市場の活性化につながると訴えた。

SPECIAL

「少年少女モーターサイクルスポーツスクール」
「チャレンジ」「発見」「感動」——そして親子の絆

お母さんも必死で手助け

「パパ、一度も転ばないで乗れたよ」と、ヘルメットをとってにっこり笑ったわが子の姿をみて「そうか、よくやったな」と、思わず目頭を熱くしながら胸をなで下ろすお父さんとお母さん。北2ゲート西側にある中央休憩ゾーンでは、こんな親と子がふれあうほほえましい光景がみられる。

慣れてくると自力で
隊列走行もこなす

走行前にインストラクターからバイクの機能を聞く

会期中の土曜と日曜日、休憩ゾーンの一部は特設の“サーキット”に変身。NMCA日本二輪車協会が社会貢献の一環として、東京モーターショーの会場内でも「少年少女モーターサイクルスポーツスクール」を前回(2005年)に引き続き実施している。

スクールの目的は、小学生が青空のもと、初めてバイクと出会うことで、汗をかき、ころび、風を感じながら「チャレンジ」「発見」「感動」を実体験。会場で当日予約した“受講生”は専門のインストラクターの指導のもと、50ccのミニバイクに初トライ。最初は悪戦苦闘するわが子をお父さん、お母さんが必死で手助けするが、すぐに慣れると、最後はパイロンで作られたミニコースを自力で走行し、終了する。わずか40分ほどの“特訓”だが、親子で学ぶことも盛りだくさんで絆も深められる。

EVENT

今日のイベント(予定)

10月29日
(月)

- シンポジウム 第2回「持続可能なモビリティへの一歩」
13:00~17:00 (国際会議場2階 国際会議室)
- 第5回 全日本 学生フォーミュラ大会参加車両・デモ走行
11:00~12:00/13:30~14:30/15:30~16:30
(中央休憩ゾーン)
- スロットカー・サーキット
10:00~18:00 (北ホール2階・キッズパーク)
- ミニシアター〜クルマの夢・楽しさ・素晴らしさ〜
10:40~12:25/13:05~17:35
(国際会議場3階 302号室)

- 4×4 アドベンチャー同乗試乗会 (特設専用コース)
11:00~16:00 幕張海浜公園Gブロック内
- セーフティドライブ体験試乗会 (特設専用コース)
11:00~16:00 幕張海浜公園Gブロック内
- クリーンエネルギー車同乗試乗会 (特設専用コース)
11:00~16:00 幕張海浜公園D・Eブロック内
- 商用車同乗試乗会 (南休憩ゾーン東側通路発着)
11:00~16:00 幕張メッセ周辺公道

※試乗券配布場所: 幕張メッセ南休憩ゾーン西側 ※天候等の都合により予定が変更になる場合があります。



KONICA MINOLTA



高速・高画質・高品質 最大65枚フルカラー出力

印刷から加工までインラインで高速処理。多様なニーズに応えるハイパフォーマンス。

※A4ヨコ

ON DEMAND PUBLISHER C65

The essentials of imaging

このニュースは、コニカミノルタ
ON DEMAND PUBLISHER
C65で出力しています。コニカミノルタ ビジネスソリューションズ株式会社
プロダクションプリント事業部
TEL 03-5205-7820
URL http://konicaminolta.jp/pr/odp

The 40th

TOKYO MOTOR SHOW 2007

10月28日の入場者数 122,600人

入場者数累計 260,200人

東京モーターショーニュースVol.5 2007年10月29日発行

発行所 社団法人 日本自動車工業会 広報室
〒105-0012 東京都港区芝大門1丁目1番30号 日本自動車会館
TEL.03-5405-6119 FAX.03-5405-6136
WEB SITE www.tokyo-motorshow.com

JAMA